

支える・つなぐ・あゆむ

一人ひとりが輝き ともに未来を創る大津の教育
— 鳴かぬなら OOOOOOOO ホトトギス —

大津市教育委員会教育長 島崎 輝久



1月からNHK大河ドラマ「豊臣兄弟!」が始まりました。元来、歴史が好きな私は、名前は聞いたことがあっても、生い立ちや功績をほとんど知らない秀吉の弟、小一郎（のちの豊臣秀長）に焦点が当たっていること、地元大津市がいつ、どの場面に取り上げられるのかなど興味津々。日曜日の夜8時を「まだかまだか」と楽しみにしている昨今です。

さて、増加の一途を辿る不登校児童生徒に対する文部科学省の施策を受けて、各自治体は学校内に「子どもが安心して自分のペースで活動できる場所」の設置を進め、この「場所」は、一般的に「校内教育支援センター」と呼ばれています。

本市においては、この「場所」を「**校内ウイング**」と名付け、令和6年度から**すべての市立小中学校に開設**してきました。「広報おおつ2月号」には特集記事が組まれ、モデル校の状況や、「教室でしんどくなったら・・・という不安が和らいできた」「他の子どもがいる午前中にも登校できるようになった」など「校内ウイング」を利用する子どもの声が紹介されています。また、「それでも学校に行くことは難しい・・・」という子どものために、小・中学校別で市内にそれぞれ3か所（計6か所）開設している「**教育支援ルーム・ウイング**」についても掲載されています。ぜひ、多くの方に目を通していただきたいと思います。

このように、校内ウイングの存在によって行きづらさが安心感に変わり、一歩踏み出そうとする子どもが増えているのは嬉しい傾向ですが、子どもの心に変化がみられるようになった時こそ、そばにいるおとなの役割はとても重要です。それでは、どのような関わりが望まれるのでしょうか。

織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の性格を表したとされる見出しの有名な句があります。「鳴かせてみせよう」の秀吉タイプはどうでしょう？不登校に限らず、子どもは「余計な干渉をされるのは嫌、でも、放ったらかしにされるのも嫌」といった矛盾した思いを周囲の人に対して持っています。「もう大丈夫」とばかりに、つい口出しをしたり、先回りしてやってしまったりするおとなは、タイミングを誤ると、子どもが少しずつ蓄えてきたエネルギーや、築きかけている「心の居場所」を霧散させてしまう場合もあります。では、「鳴くまで待とう」の家康タイプはどうでしょう？手をこまねいて時間が経過するのと、見守りながら功を焦らないのとでは、全く意味合いが違います。適時適切な見立てと目指す方向性を確認しながら、子どもが主体的に選択できる材料・手段をたくさん準備し、次のステップへの前進をそっと支援する姿勢が大切なのです。パナソニックの創業者である松下幸之助氏は、三英雄の句に対して、『鳴かぬなら それもまたよし ホトトギス』と言われました。鳴かぬことも個性、鳴かないホトトギスはあるがまま受け止め「そういうこともある」と認める・・・このような受け止めが大切な場合もあるかもしれません。

渡り鳥は、疲れたり傷付いたりすると、ゆっくりと翼を休めます。やがて回復すると、再び、次の目的地へ向かって羽ばたいていきます。このことから名づけられた「ウイング」で、じっくりとエネルギーを蓄えた子どもたちが、自分の夢や目標に向かって挑戦できるよう、本市教育委員会・市立小中学校は温かく、そして、粘り強く支援していきたいと考えています。

令和7年度 大津市教育支援センター 事業報告

当センターでは、前身である「教育相談センター」時代からの相談業務をはじめ、今日的な教育課題である不登校支援、さらには特別支援教育など、ワンストップ窓口として、子ども・保護者・学校への支援の充実を図っております。

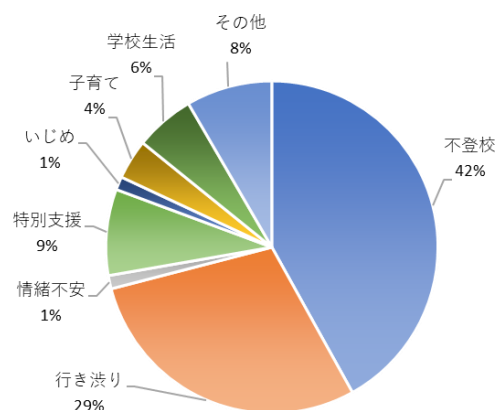
※各事業等の数値は令和8年2月末時点のものです

[illegible]

電話相談（月～土、9:00～17:00）

○今年度の電話相談 1,089 件でした。そのうち、保護者からの相談件数は 155 件で、主な相談内容は「不登校」と「行き渋り」となっています。（右のグラフ参照）

○最近は市立小・中学校だけでなく、国立、私立学校の保護者、祖父母からの相談も増えています。



来所面接相談（月～土、9:00～16:30）

○今年度の来所面接相談の延べ件数は 1,995 件でした。内訳は保護者・本人が 1,989 件、学校が 6 件となっています。毎週同じ曜日・時間に行う親子並行面談の面談枠が今年度も 12 月末でほぼいっぱいとなりました。

○今年度より、フリースクール等民間施設(FS)の利用者を対象にした「スクラム面談」をスタートし、児童生徒のべ43人、保護者のべ112人が心理師と面談をし、当センターと繋がりをもっていただく機会となりました。



不登校支援事業

教育支援ルーム「ウイング」

○今年度は小学生 29 人（前年度比 7 人減）、中学生 47 人（同 2 人増）でした。中学生が過去最多の人数となっており、特にウイング瀬田の利用者が増加しています。

○アウトリーチ型支援からウイングの利用に繋がったり、ウイングから校内ウイングへの登校や放課後登校、学校行事への参加が見られたりしました。

○中学校と連携して教育支援センターで定期テスト等を受験できる機会を設けました。

◆令和7年度の開設状況

	ルーム名	場所	月	火	水	木	金	通級する児童・生徒数						合計
								1年	2年	3年	4年	5年	6年	
小学生	ウイングおの	小野児童館		○	○		○	0	0	3	2	3	2	29
	ウイングぜぜ	生涯学習センター		○	○	○		0	0	2	4	3	4	
	ウイングせた	瀬田北市民センター	○			○	○	1	0	0	1	1	3	
中学生	ウイング・レイク	明日都浜大津	○		○	○	○	3	9	17	/			47
	ウイング・スカイ		○	○		○	○							
	ウイング和邇	和邇文化センター		○			○	2	0	4				
	ウイング瀬田	瀬田東市民センター	○		○			1	7	4				

アウトリーチ型支援

- 不登校（傾向）の状況にある子どもについて、その長期化・固定化を防ぐため、教育支援員（教員OB）と公認心理師とが当該学校を訪問し、要因や背景等の見立てを行い、自宅や支所、校内ウイングなどで個に応じた支援を行いました。
- 今年度から、小学生対象のアウトリーチ型支援の体制を拡充したことにより、小学校でのべ103件、中学校はのべ273件の支援を行いました。

専門医によるところとからだの相談

- 学校だけでは対応が難しい医療面の課題を抱えた児童生徒ならびにその家族への支援のあり方について、学校が専門医に相談し助言を受けることで、疾患や治療に対し正しく理解をし、適切な対応につなげることができました。小・中学校で10件の相談があり、今年度は小学校からの依頼が多かったです。

■ 特別支援教育事業

就学相談

- 特別支援学級への入級や特別支援学校への進学についての相談を実施しました。夏休みには就学相談会を11回実施し、多くの保護者や学校関係者が参加し、じっくりと話し合いをしました。

◆相談実施人数の推移

区分	R 5	R 6	R 7
就学前	234 人	209 人	247 人
小学生	280 人	273 人	313 人
中学生	26 人	28 人	20 人
合 計	540 人	510 人	580 人



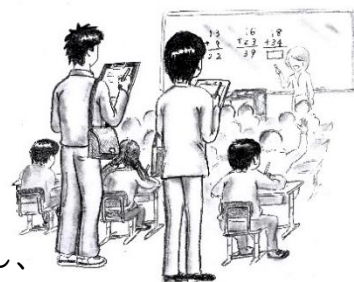
ことばの教室

- ことばに課題（言語発達の遅れ、吃音、発音、コミュニケーションの苦手さなど）のある幼児・児童・生徒を対象に、個々の状況に応じた支援を行いました。

◆ことばの教室の利用状況

教室名	場所	通級者数	指導件数
北部教室	志賀南幼稚園内	56 人	586 件
中央教室	明日都浜大津1階	58 人	800 件
南部教室	瀬田幼稚園内※	76 人	957 件

※南部教室は令和7年度のみ瀬田幼稚園内に設置し、令和8年度からは膳所小学校内に再設置



特別支援教育巡回訪問および参画型支援

- 小中学校を対象に特別な支援を必要とする児童生徒の状況を把握し、学校での具体的な支援方法について相談・助言を実施しました。

- ◆教育支援員（教員OB）や公認心理師・発達相談員による巡回訪問 【655 回実施】
- ◆教育支援員（教員OB）が指導力向上を目的に学級指導に継続的に参画 【3 回実施】
- ◆多職種の相談員（通級指導教室担当教諭や特別支援学校教諭等）による専門的な巡回相談 【169 回実施】

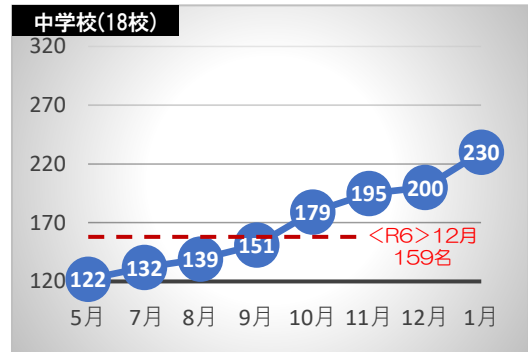
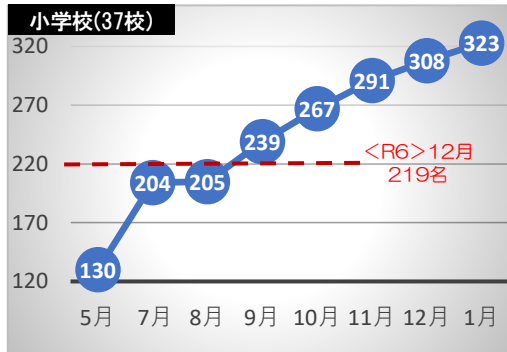
◇ 校内ウイングの利用状況 ◇

令和6年度から全ての市立小・中学校に校内教育支援センター（校内ウイング）を設置し、信頼できる大人とのつながりを大切にし、子どもが自分のペースで学習や生活ができるよう環境作りを進めてきました。今年度も校内ウイングを利用する児童生徒の数は増え、12月に実施したアンケートでは「以前に比べて少しずつ学校に来やすくなりました」という声がありました。一方で、小・中学校とも月ごとの7日以上欠席者数と全欠席者数は減少傾向にあり、各校での不登校支援が徐々に実を結んでいます。



広報おおつ2月号
ウイング特集

令和7年度校内ウイング利用者数(1月末時点)



教育（education）の支援センターとして

教育支援センター 所長 中川 恵実子

冬のオリンピックでは、なかでも「リクリゅう」ペアのスケートに、技の秀逸さやメダルを超えた感動が話題となりました。試合中の痛恨のミス、打ちひしがれる木原選手。翌日の最後の試合に向かうときのことを、ペアの三浦選手はこう語っています。「（木原選手に）いつも支えてもらっていたから、今度は私が支える番」。誰かに支えてもらっているという実感は、いつか他の誰かを支えたいと駆り立てる何かを引き出すのかもしれない。

センターには、学校と同じように、いろんな思いや気持ちの子どもたちと保護者のみなさまが、教育相談や市ウイングでの活動などに訪れています。部屋の中にはプレイルームと呼ばれる所があり、時には遊びの中から自然な形で子どもが本来もっている力が引き出されます。

三寒四温のすすむ3月のある日、最後の相談の日を迎えるお子さんがいました。別れに直面することはつらく名残惜しいものです。通うたびに少しずつ、およそ1年かけて並べてきた作りかけの1,000ピースのパズル、どうしようか。しばらくの葛藤を経て、これまでの自分の歩みについて自分のことばで語り、やがて、心を込めて片付けをし、美しいことばでお別れを述べました。完成まであとほんの100ピース、だけど、次に4月から使うであろう誰かのため。そして、明日からの自分のため。終わることと始まること、自分で決める自分に出会えました。

センターでは多様な専門職が、保護者のみなさまや学校とともに、子どもたちの育ちをお支えています。子どもの成長にこだまし合う喜びに通底するのは、「子どもってすごいね」です。

教育（education）の語源は「引き出す」。立ち止まることにこそ実は生涯発達上の大きな意味がある、そんなかけがえのない瞬間に立ち会う私たちもまた、子どもとの関わりの中で学びが引き出されるこのダイナミクスに、真摯にならずにおれません。

誰かのつらい思いや気持ちは、きっと、誰もが輝くためにいち早く知らせてくれる、いわば社会のカナリア※なのでしょう。教育の支援センターとして、誰もがその子らしく歌い、羽ばたける社会であるために、一人ひとりが輝き、ともに未来を創る大津の教育を目指して、教育相談、不登校支援、特別支援教育の充実に向けて、所員一丸となって邁進してまいります。これからも多くの皆様に当センターをご活用いただけますと幸いです。

※かつて炭鉱ではその危険察知能力から鳥かごに入れて坑道に入っており、「炭鉱のカナリア」といわれる。

あ と が き

英語科教員の特性なのか、日常よく目にしたり耳にしたりするカタカナ英語が気になり調べることがあります。例えば某会社名が創業者の苗字（石橋氏、鳥井氏）に由来することは有名な話です。教育支援センターの「ウイング」はどうかと紐解いてみると、平成7年の所報創刊号に「つばさを休めてのんびりと、光をあびておおらかに、風をつかんですこやかに、生きている喜びを仲間とともに、あの雲めざして大空へ」と書かれてありました。大河ドラマ「江〜姫たちの戦国〜」や「豊臣兄弟！」ゆかりの長浜市に毎冬「山本山のおばあちゃん」の愛称で親しまれている雌のオオワシが飛来します。その名に親しみを感じ、湖岸道路から一度見かけたことがあります。そのオオワシ、冬の間、琵琶湖で「つばさ」を休めたのち、今年は2月21日、再び北の空へと向かいました。「翼(wing)」と似た言葉に「羽(feather)」があります。多少の違いはあるにせよ、大津の子どもたち一人ひとりが、様々な経験や人との繋がりを羽のように重ね合わせ、翼を広げて逞しく揚々と羽ばたくための支援ができたのではないかと、少し誇りに思っています。